

## Ⅸ 学会等发表原稿



# 若年母子の集いの課題と今後の取り組みの方向性の検討

佐倉市健康増進課 ○網代 香織 上條 友美 豊福 啓子

## I 目的

佐倉市では、ポピュレーションアプローチとして、乳幼児とその保護者を対象とした「母子の集い」を開催していたが、子育て支援センターや園庭開放を行う施設の増加など、子育て支援が充実している状況を鑑み、若年妊産婦などのハイリスク者を対象とした事業を開始することとした。

妊娠届出時に10代だった妊婦の追跡調査を実施した結果、第1子が3歳になるまでの間に、離婚や引っ越しなどの大きなライフイベントを経験する者が多く、育児への影響が強いことが判明した。また、連絡がとりにくい対象でもあり、乳幼児健診等の母子保健事業の未受診など、行政サービスにつながりにくい者もいた。

これらのことから、10代で妊娠・出産した母親が地域で孤立することなく、健やかな育児ができることを目的として、平成23年10月から若年母子の集い「happy mama style (以下、ハピママとする)」を実施している。しかしながら、開始当初と比べると、参加者は減少しており、周知方法や開催内容などの見直しの必要性があることから、これまでの活動を振り返り、事業課題と今後の効果的な取り組みの方向性について検討する。

## II 方法

- 1 平成23年度から平成29年度までのハピママの概要と経過、活動内容を整理する。また、参加者の感想、意見をまとめる。
- 2 事業運営状況や整理した結果を元に、事業課題と今後の取り組みの方向性を検討する。

## III 結果

- 1 活動・運営内容の整理、これまでの活動の振り返り

### 1) 活動内容

毎月1回(年間12回)市内の中心に位置する健康管理センターで開催。参加者の定着を図るため、開催曜日を固定し、就学前まで参加可能としている。月ごとにテーマを決め、母子の交流、保健師や栄養士等の専門職による健康教育、育児相談を実施。食生活改善推進員などの地域のボランティアにも協力を依頼した。教育的要素を取り入れつつ、母子の交流や工作、試食など参加者が楽しめるイベントも組み合わせながら実施していた。しかし最近では、参加者がいない回もあることから、食生活改善推進員などへの依頼が困難になり、イベントの実施回数が減っている。

### 2) 周知方法

ハピママには、現在28組が登録している。新規対象者には随時案内を郵送し、既登録者には、毎月メールと郵送で通知をしている。リーフレット(図)も母の目に留ま



(図) リーフレット

りやすいよう、カラフルな色合いにするなどデザインも工夫した。また、気軽に申し込めるよう、従来の電話申し込みに加え、QRコードを取り入れメールでの申し込みも可能にした。

### 3) 事業対象者の概要

事業の対象となる、市内の20歳未満の妊娠届出数は表1のとおりで、経年的に増加傾向はみられない。参加者数については、表2のとおりで、ここ2～3年の間で減少し、参加者がいない回も出てきた。参加者の居住地については、表3を参照。

表1 佐倉市の20歳未満の妊娠届出数の推移 (件)

年 度	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29
妊娠届出総数	1,256	1,186	1,172	1,217	1,082	1,054	1,035
10代届出数	10	17	15	15	24	16	11

表2 参加組数の推移 (組)

年 度	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29
母子の実組数	15	(-)	(-)	12	(-)	12	6
母子の延組数	24	46	43	36	43	23	13

※年間12回開催。平成23年度は10月に開始しているため開催回数は6回

※(-)については、集計されていなく組数不明

表3 登録者の地区別居住地(平成30年11月末現在/組)

管轄保健センター	健康管理センター (ハピママ開催場所)			西部保健センター	南部保健センター
地 区	佐倉	白井	千代田	志津	根郷・和田・弥富
組 数	5	4	1	13	5

### 4) 参加者の様子

母親は自ら声を発しないため、最初は「話しかけてほしくないのでは」と思ったが、実際は人と話すことや自ら発信することが苦手なだけで、職員からの声かけを待っていることが多いことに気付いた。母親同士でも、どのように他の母親と距離を縮めていけば良いかわからない様子で、保健師が関係をとりもたないと交流ができない状況だった。徐々に母親同士の交流が増えるとともに、連絡先を交換する場面もみられ、「ママ友ができた」と嬉しそうに報告をしてくる母親もいた。参加者同士で遊びに行くこともあったようだ。母自身年齢相応の遊びを我慢しながら、母親としての役割を果たそうとしている者も多かった。継続的に参加する母親もいたが、次第に、母親自身の就労や復学、児の就園、転出などを理由に辞めていく者も出てきた。市の保育園数の変化をみると、ここ数年で約2倍近く増え、10代の母親も就労しやすい環境になりつつある。子育て支援センターや児童センターも各地区に開設された。平成28年度には、子育て世代包括支援センターが開設され、妊娠期から切れ目のない支援の充実を図っている。このように、ハピママを立ち上げた当時と比較すると、母子を取り巻く、社会資源や子育て支援の充実が図られている。

最近では参加者が少なく、参加者同士の交流が図れない状況に陥っている。過去のハピママの参加者から「みんなでお花見をしたい(外に出たい)」「自分たちが食べるだけでなく、みんなで調理実習をしたい」「自宅の近くで開催してほしい」などの声があがっていた。また、参加者数の減少に伴い、中断した理由やニーズ等を把握するため、平成29年度、ハピママに登録している33組に対し、郵送によるアンケート調査を実施したが、返信数は0件であった。

## IV 考察

### 1. ハピママを実施して得られた成果

会を重ねるごとに、参加者は保健師の顔や名前を覚えてくれるようになり、保健センターや保健師を身近な存在として感じてもらえるきっかけになったと思われる。担当者からの電話連絡にも応じるようになり、欠席連絡や母親から育児相談を受けることも増え、援助関係の構築につながったと考える。

支援者側も、定期的に若年の母親に関わることで、若年の母親に合った対応をすることができるようになり、ハピママの場面だけではなく、窓口対応や健診の場面等でも生かされるようになってきた。

### 2. 課題

参加者が減少している要因について、下記の2点があげられる。

1点目は、活動内容について、参加者のニーズと現在の内容にギャップがあるため、参加者の定着につながっていない可能性がある。また、アンケート調査の返信数が0件であったことから、ハピママへの関心が薄いことも考えられる。

2点目は、母子を取り巻く環境が変化していることである。ここ数年、市内の保育園数や子育て支援施設は増加している。また、SNS（ソーシャルネットワーキングサービス）も発展を続け、必ずしも他者との対面によるつながりを求めていることも影響していると考えられる。メールによる受付や案内方法が効果的だと思われたが、LINEなどのSNSが主な連絡ツールになっているため、有効でない可能性がある。

さらに、妊娠期から切れ目のない支援の充実が図られたことから、若年の母親は早期に必要な支援につながっている。ハピママの運営内容に加え、ハピママの今後の在り方を検討する必要がある。

### 3. 今後の方向性

ハピママの運営・活動内容について、対象の多い地区の保健センターや保健センター以外の会場での開催を検討したり、調理実習など参加者が主体的に活動できるプログラムを導入する等、これまでに出了た母親からの意見を参考に内容の充実を図っていききたい。また、若年の母親のニーズや希望など実態把握が不十分であるため、妊娠届出や母子事業に来所した母親に声をかけるなど、情報収集を行い、若年の母親のニーズに応じた活動につなげたい。

また、現時点ではSNSを活用した事業周知は困難だが、若年の母親がハピママに興味関心をもてるよう、対面で紹介する際に、活動内容が伝わりやすいよう、写真等を用いた媒体を利用するなど、周知方法の工夫を検討する。

佐倉市では、若年の妊娠届出数の増加はみられないが、未婚の妊娠で経済基盤が不安定なケース、実父母と関係不良なケースなど様々な社会的ハイリスク妊産婦が見受けられる。引き続き佐倉市の母子の状況や課題の把握に努め、ハピママの運営方法や事業目的などの見直しとともに、時代の流れや母親のニーズに即した事業展開を目指したい。

## V 参考文献

大川聡子：10代の妊娠・出産の現状と必要な支援、地域保健、Vol.46.No.9.

佐倉市保健事業のまとめ ー平成30年度ー

---

令和元年11月発行

発行 佐倉市健康子ども部健康増進課  
住所 〒285-0825  
佐倉市江原台2-27 (佐倉市健康管理センター)  
電話 043(485)6713

---